

東京大学理学部

# 廣報



## 目 次

表紙の説明 .....	1
理学部長就任に当って .....	藤田 宏 ..... 2
博士課程修了者を送る .....	朽津 耕三 ..... 4
理学と基礎研究 .....	和田 昭允 ..... 5
評議員をお引受するに当たって .....	小口 高 ..... 7
植物園の図書と「原文庫」 .....	岩槻 邦男 ..... 8
国際交流室の活動 .....	守 隆夫 ..... 9
十周年を迎えた「地殻化学実験施設」 .....	脇田 宏 ..... 11
科学の言語と日常の言葉 .....	寿栄松宏仁 ..... 14
山口嘉夫先生の紫綬褒賞受賞を祝して .....	江口 徹 ..... 16
和田文吾先生を偲んで .....	田沢 仁 ..... 17
学 部 消 息 .....	19

## 表紙の説明

### 植物園の図書

1542年刊のL.Fuchs : DeHistoria Stirpiumをはじめ、植物園には多数の貴重図書が収蔵されている。その図書に、更に貴重な蔵書が追加された（本文8ページ参照）。

図の手前左は、インド植物研究の端緒を開いたWallichのカタログであり、手前中央は、進化論のC.Darwinの著作の1つで、花と昆虫の共進化を論じたものである。

岩 槻 邦 男（植物園）

## 理学部長就任に当って

藤田 宏

この度、はからずも選出されて理学部長に就任しました。ここに、理学部の皆様にご挨拶申し上げる次第です。

いまさら申すまでもなく、理学部は深く自然科学の真理を究め、かつ、その方面の人材を育成することを使命とする学問の府です。現在の実員で言えば、163名の教授会メンバー（教授、助教授、講師）および177名の助手達からなる340名の教官団が、諸先輩の輝かしい実績を発展させ国際的な尊敬と社会の期待に応えるべく、日夜、理学の研究教育にいそしんでいます。また、人手不足等の厳しい状況にたえて、研究教育の実務面を支えている職員の人数は181名です。さらに、理学に志を立て、理学部あるいは理学系研究科にぞくし、自然科学の学徒の道に精進している学生・院生の人数は1,646名に達します（学部学生540名、修士院生538名、博士院生568名）。

このように多数の人達の理学部における活動あるいは生活に関与する学部長の職は誠に重任であり、身のひきしまる思いです。浅学非才の身ではありますが、一生懸命努力するつもりですので、宜しく御協力をお願い致します。幸い、直接の相談相手として学部長を補佐して下さる評議員には、学識経験が豊かで人間的な器量も卓抜な和田昭允教授と小口高教授が就任して下さっていることは心強い限りです。

私は、理学部長として数えて31代目に当たります。本来学部長の任期は2年ですが、私は停年退官を来年3月に迎えますので、1年間しか御奉公ができません。実は、前理学部長朽津先生の場合も同様でした。つまり、このところ理学部長が1年毎に代るわけで、継続性を要する仕事も多く受持つ学部長職としては具合が悪いのではないかと心配になります。確かに、不慣れで実のある仕事で

きないうちに在任期間が過ぎてしまう、あるいは、日常的な用務に行政官的に対応することだけに埋没してしまう危険があります。

この点、大いに戒心するつもりですが、理学部の現状や将来に深く関わる重要事については、もともと、判断や意志決定の基盤は、大学自治の精神からいっても理学部人の英知にあります。とくに、教授会のメンバーが理学の研究教育の専門家としての使命感と情熱に基づいて理学部のことを深く考え続けて下さるならば、学部長が些か短期にワンポイント・リリーフ的に交代しても、理学部の意向は確然として継続し得るものと信じます。多事多端の中にあって、重要なことについては教授会の英知を結集できるように、物事の軽重の判断を誤らずに報告し、「理によって立つ」学部らしい率直かつ明快な審議をお願いしていくことこそ、教授会の議長としての学部長の役割りと心得ています。

私は、助手の時代まで物理学科に在籍し、その後、数学科に教授として参加するまでの約7年間を工学部の講師・助教授として過しました。ちなみに、この工学部在任期間は、私にとって最も自分の研究に集中できた時期でした。閑話休題。この私の経験に照らしても、同じ理科系の学問の研究教育を任務とする工学部と理学部ですが、研究対象および方法の多様性、さらに、その反映である学科・教室の形態やそこに所属する研究者の気質の多様性は理学部が断然きわだっています。数学で対象とする無限次元空間での発展系や $n$ 次元複素空間の図形は、数学者にとっては正しく実在ですが、生命ある動物・植物を対象とする生物学の研究対象から遠いものであることは確かです。同じ生物学にしても、生物の集団や個体を対象とする自然史的な分野と細胞さらには遺伝子とミク

ロに踏みこむ分野とがあり、その両方が大切であることは素人の私にも分ります。教室のサイズで言えば、理学部には、22講座をかかえる物理学教室もあれば、2講座だけで奮闘している鉱物学教室、人類学教室、地理学教室もあります。歴史の長短でいえば、附属植物園の源は幕府の薬草園ですので、植物園は300年の歴史を誇りますが、一方、学科として最も新しい情報科学科は昭和50年の設立です。

理学部全体を通して共通なものは、科学的真理を究めようとする好学の志だけかも知れません。このような多様性に彩られ、かつ、全体として限界に近い大きさに達している理学部が、学部としてのまとまりを保ち、先輩から受け取り後輩に引きつぐべきidentityを持ちつづけるためには努力が必要です。その最たるものは、各人が自分の専門以外の学問に対する尊敬と思いやりを持つことだと考えます。学問の動向により、現在あるいは近未来において必然とされる学際的研究教育・広域的研究教育を理学部において育成することも、このような人間的な理解とつながりの上にも可能であると思います。

御承知のように大学における理学の研究教育を取りまく環境は容易なものではありません。将来の日本国民の有意義な知的活動や社会の繁栄は、基礎科学の振興、とりわけ、それを担う人材の育成にかかっています。しかるに、世の有力者の中

には、短絡的に「知識の時代は終り心の時代に入った」と情意面の教育のみを強調したり「投資効率の良さからは研究は研究所で」と成果をいそぐ向きがあることは寒心にたえません。未来型の学問の自由な成長の場たるべき大学における研究の衰退を座視することは国民の未来を損う国賊の所業です。また、科学自身も国際協同と表裏をなす国際競争の厳しい世界です。

理学の研究教育の場を質量ともに改善するため、とくに、現在の院生・学生をはじめとする我々の後輩達が、諸外国の競争相手に比べてハンディキャップを背負うことなく能力の限りを発揮できる場を構築するために我々自身による献身的な努力が必要です。その表れの一つが御存知の理学院構想であり、理学院計画の推進です。理学院計画は、日本の理学部における研究教育の改善の血路を拓くため、敢て先兵たらんとするものであり、東大において成功してみせれば、それが諸大学の学院構想への起動力になるでしょう。基礎科学に向けての行政の力入力を励まし誘導するためにも我々による先鞭が必要です。現制度の中で「百年河清を待つ」という怠慢は許されませんが、一方、理学院の立案はまだ進行段階です。大学院問題を単なる闘争の材料に利用するのではなく、真に理学の発展を願う人達ならば、どの立場からでも忠告・忠言を寄せて下さることをお願い致します。

## 博士課程修了者を送る

理学系研究科委員長 朽津耕三

皆さん、本日はおめでとうございます。めでたく理学博士の学位を受けられたことを心からお祝い申し上げます。いま、一人一人の方に学位記を渡しながら、私は皆さんがこの学位記を取得されるまでに、どんな経緯があったのだろうかと考えておりました。皆さんの中には、抜群の才能に恵まれてずっと順調に研究を進めて来られた方もありましょう。しかし、大部分の方々は自らの研究能力の限界に挑戦し、挫折感・絶望感を何回となく味わい、また学問的・人間的に悩みながら、ひたむきに努力を続けてやっと糸口をつかみ、今日を迎えられたのではないのでしょうか。その意味で、博士の学位記とはその努力と成果に対する勲章のようなものだといえましょう。私自身の経験もそのとおりでした。マラソンにたとえれば、落伍することなく完走することは順位よりも重要であり、学位とはその完走の証なのではないのでしょうか。

「博士」というタイトルは、日本では日常会話の中ではあまり使われません。ある人に対して誰々先生と呼びかけることはあっても、誰々博士とは呼びません。しかし外国では、Dr. が非常に大きな意味を持っています。それは博士号を持つ者は一人前の研究者であるとみなされるからです。これからは皆さんも、国際学術交流の場ではDr. と呼ばれて、一人前の研究者として扱われることになりましょう。では、一人前の研究者とはどのような人なのでしょう。私は「博士」の資格を次のように考えています。

まず第一に、オリジナルペーパーを単独名で出せることです。皆さんは今までは、指導教官の指導の下に研究を行ない、大部分の方々は、指導教官と共著で論文を書かれたことでしょう。オリジナルペーパーを単独で発表するためには、オリジナルな研究課題を自ら着想するところから始まっ

て、研究を実行し、論文を書き、それがレフェリーの査読を通して雑誌に出るところまで持って行くだけの研究能力が必要です。

次に、単独で一流のレビューペーパーが書けることです。さらに一流の国際雑誌のレフェリーになれること、いろいろな研究プロジェクトに独立の研究者として参加できることも必要な資格であると思います。

また、学問的な面でも人間的な面でも後輩を指導する能力を有することも大切であると思います。そのためには、博士の資格として学問的な成熟だけでなく人間的な成熟も必要であるといえましょう。

あるアメリカの物理化学者は、指導する学生を毎年一人しかとらなかつたといわれています。その学生が Ph. D. を取るころになると、その学生を自分の別荘に呼んで、一夏を一緒に生活して指導したのです。学位論文を書くことに対する指導をしたのはもちろんですが、それ以上に、その学生が良い学位論文を書くための基礎となる思考を実らせるために学問的なディスカッションをしたのです。その教授は、このようにして生涯、毎年一人の Ph. D. の学生を世に送り、その学生たちは一人一人が立派な研究者として活躍しました。私はこの話を知って、こういう先生もいるのかと感心し、学生の指導というこの話を思い出します。

皆さんは大学院生活で、指導教官をはじめ研究室内外の研究者の人々との間の学問的・人間的関係に悩んだ事があるかもしれません。大学院生活の日々に経験されたさまざまな事柄は、皆さんが将来指導的立場に立ったときに必ず役立つことでしょう。どんなスポーツでも、良い監督やコーチは、必ず選手時代の多様な経験を土台にしていると聞きます。

皆さんの将来には様々なことが待ち受けていると思いますが、「マラソンを完走できた」という自信を心の支えにして、何らかの分野で、願わくば今日まで過してこられた分野とは異なる分野で、

本当にオリジナルな仕事を発展させていただきたいと思います。

どうぞ、お身体に気をつけて活躍して下さい。

(昭和63年3月29日 収録)

## 理学と基礎研究

—その理想と現実についての素朴な感想

和田 昭 允 (物理学教室)

のっけから不粋な話で恐縮だが、4月初め、理学院の設立準備のための調査費要求書の冒頭に、その背景と意義について私は次のような趣旨の事を書いた。

“近年、わが国の基礎科学研究の現状に対して国際社会の強い批判が向けられて来ている。そこでの問題点として、研究環境の劣悪さ、若い研究者への配慮の不足、大学における研究の柔軟性の欠如、が指摘されると同時に、わが国の社会一般に、自然解明のための科学 (Natural History, Natural Philosophy = 理学) 研究への理解と支持体制の欠如が上げられている。

理学の発展は、一方で伝統をふまえながら、他方では新しい問題に奔放に対応して行くところに見られる。これは、自然科学が、その長い歴史において築き上げてきた精緻かつ強固で広範な基盤に立ちながら、その内部では激しく沸騰しながら反応変化し、それがまた新しい基盤となって定着していくという特徴的な動的構造をもっているからにはかならない。

本要求の基本的精神は、わが国のみならず国際的な視野においても基礎科学の進展に大きな責任を持つ東京大学理学部が、伝統的な基幹学問分野 (discipline : 東京大学理学部の各学科または教室はこれらの基幹分野に対応して設置されている) に基礎をおく一方で、複数の学問分野にまたがる領域 (広域分野) での学際的研究を自由奔放に行おうという原点から発しているものであり、本学部年来の悲願を具体化しようというものなのであ

る。

ひるがえって、本要求を社会的な面でみるならば、それがわが国の高度工業化、情報化、さらには種々のハイテクノロジーの誕生にともなう社会の多様な要請に応えるものであることは言をまたない。そのひとつは、基礎科学全般に広い視野を持つということが高く評価され、確とした基礎知識にもとずいて、いかなる科学技術の発展にも適確に対応できる本学理学系大学院終了者の高いレベルを維持し、さらに向上させてゆくことである。いまひとつは云うまでもなく、研究の高い質と広がりであって、これによって各方面から急増している需要に応じる一方で、社会の多くの技術ニーズに応えるためのシーズを育てる苗床の役割を果たすことになる。

今日、わが国は国際的に高く評価される技術大国となっている。しかし、その基盤については外国の借り物という批判が強い。今こそ、わが国が国家百年の大計をもって理学の振興をはかるべき時であり、その基盤なしには21世紀に生き残れないだろうということは、すでに国の内外の多くの識者の指摘するところである。(以下略)”

このように書いてきて、21世紀の国際社会におけるわが国の地位を左右するかもしれない、我々の大きな影響力と責任をあらためて痛感した次第である。国際社会における本当の尊敬は、その国の知的創造性と文化的資産に対してこそ払われるのであって、その意味で、基礎科学研究において、東大理学部という高度の頭脳集団が果たす役割は

大きい。

いまや、いたるところで基礎研究の振興が叫ばれている。しかし、よく聞いてみると応用のための基礎という意味で使われている場合が大部分。また一方では、無責任という意味を含んだ好き勝手の研究ととられていることもある。基礎研究という言葉は、もっとその微細構造にまで立ち入って慎重に議論すべきではないだろうか。単に基礎研究が大事だとお題目を繰り返すだけでは、戦争末期に大和魂、大和魂とただ叫んでいた人達を思いだしてしまう。立派な基礎研究とは一口に言って、科学あるいは技術に大きな波及効果を持つことが充分条件。また科学という大建築の基礎となるレンガの一つを確実に積むことが必要条件だろう。ただしここで問題となるのは、研究が行われている時点で将来の波及効果が予見できないことであり、資金供与者が真の自然解明研究と思われるものに予算を出し渋るのもこの辺に原因がある。

19世紀の科学の発展には、王室や富豪の援助が大きな役割をはたしたことはよく知られている。しかし、二つの大戦を経た今日、王様（少なくとも科学に金を出そうという）はいなくなり、金持ちの大部分はせちがらくなって、もっと短期投資効率の良いものへと乗りかえた。息の長い長期積み上げ型の研究、自然界の未開部分の精密な探索、資料や標本の収集・保持など、自然探求の歴史のページを確実に書いて行こうという地味な研究は苦しくなった。このような色々なページに書き込まれた無関係と思われる事柄が重大な関連を持つことに、突然誰かが気づいて大発見につながるのに！このような不確かさを含み、且つ聞き手に高度の先見性が要求される説明は、なかなか受け入れてもらえない。

この文脈で言えば、我々理学部の人間の大部分が直面している現実には、予算が充分ないために、わくわくするように面白い自然の解明が思うようにできないという焦燥感、予算配分者の無理解、その一方で世界中にいる同業者との競争、それらからくる無力感（無力感は小生だけかも知れない）

ではないだろうか。そうかといって、「よし、そんなに面白いと思っているなら、君を信用して資金を出してやろう」という王様が出て来る世の中でもなくなった。そこで、自分の研究の重要な意義（波及効果、極限の解明、学問オリンピック優勝、学問エベレスト初登頂、先見性、独創性、社会性、国際性、そして国威発揚……）を客観的に述べて初志を貫徹しようとする。つまり個人の興味から一般受けする意義を抽出して資金供与者の賛同を得ようとすることになる。問題は、往々にしてこのプロセスが、役に立つ（極端な場合は儲る）研究の重要性を主張しているにとられて、基礎研究の純粋性を損なうものと思われてしまうことであり、もっと深刻なのは、役に立つものは基礎研究ではないという本末転倒が起こることである。かつて高橋秀俊先生が云われた“真理は必ず役に立つ”という名言を思い出さなければならない。

ここで、世の中にあるお金は有限であり、その有限のお金を出す人は、その責任上、研究費の支出について一般の人たち（たとえば納税者）からもっともな説明を要求されているという現実も考えなければならぬ。科学者は現実を直視しなければならない。この点で、自分が行った基礎研究の結果にすぐ役に立つ部分があれば、それをきめ細かく世の一般大衆に説明するという努力を、我々はもっとしてもよいのではないか。こちらには毛頭そんなつもりはないのだが、世間一般から見ると、金をもらい放しとられる場合があるのではないか（これは自己反省）。

ご存じのように英国の博物館は入場無料である。その重要性は英国の科学史が無言のうちに示しているのであって、納税者もそれを快く納得している。（もっとも、このことを最近英国の友人に話したら、納得していないのがたった一人だけいて、それはサッチャーだといっていた。）

今後、理学の振興のためには理想と現実の間の微妙な綱渡りが必要と思われる。理学部における基礎研究や理学院構想についても、その細部にわ



たって、素人わがりのする説明を根気よく続ける必要があるだろう。また、宇宙科学、物質科学、生物科学、地球・惑星科学、分子科学、人間科学……の分化・統合にみられる科学のダイナミクスについて、本当の理解を得るような努力をしなければならぬだろう。自然と理学それ自身が持つ美しい構造がよく認識され、われわれ基礎科学

の研究者の持つ柔軟な発想と適確な判断が一般の信用を得るところに、理学発展の道があるはずである。

この記事は、評議員、理学部企画委員長および理学院計画委員長としての立場から書いていただいたものである（広報編集担当）。

## 評議員をお引受するに当たって

小 口 高（地球物理研究施設）

この度、この重要な時期に、まったく思いもかけず評議員の大役を命ぜられまして、正直のところ、いまだに戸惑いを禁じ得ない状態です。現在、極く身近な所だけとって見ても、理学部の理学院への改組やこれに伴う組織の整備、関連する学科の再編、理学部集中化構想、新キャンパス問題など、私どもの将来の研究体制に直接関わる重要案件が山積していることは理学部の皆様のつとに御存じの通りです。理学部が直面している理学の研究教育体制だけでなく、現在、日本のあらゆる分野で組織の見直しや改革の機運が高まっているように思われます。研究や教育の体制を考えるには100年の計を要することは言うまでもありませんが、現在の体制が基本的にはおよそ100年ほど前にできあがったと云う事情や、戦後の変革から数えても既に40年を経て、その間の学問のめざましい進歩などを考え合せば、あらゆる分野で改革の機運が熟して来ているのはむしろ当然のことと云うなずかれます。

私どもが直接に関係する理学の研究教育の面に限っても、従来の研究分野にとられない境界領域に大変な勢いで新しい分野が生まれ、発展を遂げつつあります。更に大きくは、理学、工学の境界すら必ずしも明確とは云えない状態になりつつあるようにも思われます。このような時期に100年を見通したプランを考えるのは至難の業と云っ

ていいでしょう。全てを直ちに理想の姿にまとめるのは極めて難しいと云わざるを得ません。しかし、ことは急を要することもまた明かのように思っています。

科学研究が好むと好まざるにかかわらず次第に巨大化して行く風潮の中で、人目を引き、あるいは手っとり早く成果が期待でき、また実用性が高いなどの理由で巨大化に適した分野にのみ重点的に全てが集中していくのは理学の研究にとっても教育にとっても健全な姿ではないと思います。理学の研究が未知なるものを明らかにして行くことに価値を認めるものである限り、理学部、あるいは理学院が将来にわたって考えられるさまざまな領域について、第一級の先端的な研究の場となり、将来を担う若い人たちの教育の場になるのであればわが国の科学研究の将来を論ずることは不可能と云っていいでしょう。

研究と教育とは関係する大学の研究者のみならず、技術系、事務系全ての人々を含む組織全体の有効な改革が必要と考えます。ここに含まれるさまざまな問題を、理想に近い形でまとめて行くために、学部長を助けて出来るだけの努力を傾けたいと思います。力不足ではありますが理学部の皆様方の御協力を頂きながら責任の一端を果たさせて頂ければ幸いです。



## 植物園の図書と「原文庫」

岩 槻 邦 男 (植物園)

1978年4月にまとめられた「東京大学理学部附属植物園調査報告」に、“植物科学の原点となる自然史の研究が真に発展するためには、「生きた植物」、「標本」および「図書」が完備した研究、実験施設と、これを有効に利用するための人員の確保が必要である。”とあり、資料7に図書の概略が紹介されている。さらに、これに基き、1980年4月にまとめられた「東京大学理学部附属植物園における図書の現状と将来計画に関する報告」では、“日本において自然誌を中心とした基礎植物学の研究・教育に必要な図書をこれだけ一ヶ所にまとめて保管している所は他になく、今後基礎植物学の研究・教育を進展させてゆくためには、これらの図書の価値は計り知れないものがある。”と評価されている。

生物の多様性を扱う研究分野では、標本や図書から得られる情報は必要不可欠のものであり、命名に関する国際的な規約との関連もあって、最新の文献と同時に、種の記載などを含む古い文献も研究を進める上で欠かせないものである。古い文献を研究上有効に活用するという点では、理学部のうちでは多少特異な性格ももっている。植物園を研究・教育のための施設として充実させるためには、すでに収集されている2万冊に余る図書を活用すると同時に、さらに蔵書を加え、充実をはかることが肝要であるという理由はここにある。

1986~87年度に、植物園の図書の充実についてみるべきものがあった。1つは、まとまった植物学図書が購入されたことであり、もう1つは、故原寛教授が所蔵されていた図書の御寄贈を受けたことである。同時に、未製本のままだった1000冊以上の雑誌類の製本を行い、収納スペースの不足を来していた定期行物収蔵庫に、教育研究特別経費の配当を受けて、手動式移動棚を設置し、収

蔵量を倍増させることもできた。去る5月6日には、充実された図書の現状を御披露する会を催し、新らしく収蔵されることになった図書を実際に見ていただくこともできた。そこで、購入された図書の紹介と、御寄贈いただき「原文庫」として御利用をいただくことになった図書について、簡単に紹介させていただきたい。

1987年度の補正予算で外国図書が相当量購入されたことは、マスコミでも報道されたことである。植物学関連の図書としては、ベルダー・コレクションのようなまとまった蔵書が、先年、競売に附されたことが話題を呼んだことから、多少人々の注目を浴びることになっていた。特に、競売に附されなかったベルダー・コレクションの約半分

(図版の多いものを中心にサザビーの競売にかけられたことから、残りは文字による情報が多く、植物学上の記載の多いものだった)を日本へ導入したいという努力をしていたこともあって、(結果としては、このコレクションはアメリカへ引き取られることになってしまった。)補正予算が検討されている間に、まとまった植物学関連図書の手当てができたので、それを購入のリストに加えていただくことができた。購入に当たっては、図書館の方々にも大変お世話になったことを附記し、感謝したい。

購入された植物学図書は36点94冊で、価格は3100万円であった。18世紀から19世紀に出版されたものが中心で、日本の植物の原記載をはじめ、植物の特性を記載した貴重なものばかりである。そのうちで、話題性のあるものを拾ってみると、

Mendel, G. (1866) *Versuche über Pflanzen-Hybriden* は、エンドウを用いた実験によって、メンデルの法則を発見し、近代遺伝学の基礎となったものであるが、1900年の再発見まで学界に評価

されなかったという伝説でも有名な論文である。この論文の掲載された *Verhandlungen des Naturforschenden Vereines in Brünn, Band 5* (1865年版, 実際には66年刊行) も含まれている。植物園には、メンデルが植物学の研究材料として用いたブドウが植栽されているが、併せて近代遺伝学の曙を偲びたい。

Darwin, C. (1862) *On the various contrivances by which British and foreign Orchids are fertilized by Insects, and on the good effects of intercrossing* は、ランの花の形態と訪花昆虫の共進化に関する書で、ダーウィンが進化を論証するためにものした書のうちの1つである。被子植物の種分化との関連で、昆虫と花の共進化は現代風に解析の対象とされる課題であるが、進化との関わりで最初に論じられたのが本書である。

Wallich, N. (1828~49) *A numerical list of dried specimens* は、カルカッタの植物園が大量に収集し、主としてヨーロッパの研究機関に送り出した資料標本のリストで、ここで新らしく名前がつけられたものが多い。日本の植物と関連の深いヒマヤラの植物の研究にとって貴重な文献である。

「原文庫」は、原寛名誉教授の旧蔵書をまとめたコーナーである。原寛先生旧蔵書については、植物園に収納して関連研究者の利用の便に供するようという御好意で御寄附いただいた。大量の図書であるので、市場価値の高い351冊については正規の寄附手続きを終えているが、他の大部分については整理に手間どっていた。一部は植物園

所蔵のものと重複しており、それらについての処置なども含めて、まだ完全に整ったという状態ではないが、できるだけ早く利用の便をはかることが御寄附いただいた趣旨に沿うものであることから、5月6日に「原文庫」を開設させていただいた次第である。

原寛先生は、東京大学の経費では購入できなかった図書のうち、入手可能となった貴重書を御自分の費用で購入されておられた。だから、植物園の図書と相補的なものも多く、このコレクションを御寄附いただくことによって、植物園の蔵書が飛躍的に充実することになる。今后この図書を活用させていただく研究者を代表して、原一二美夫人に厚くお礼を申し上げたい。

「原文庫」の図書は植物分類学関連書が中心で、一般的な話題性のあるものは含まれていないが、*Bulletin de la Société des Naturalistes des Moscow* のように、植物学の範囲にとどまらず、自然誌一般の研究者にとって、他ではなかなか見られないものもあり、Curtis, W. の *Flora Londonensis* や Hooker, J. D. の *Illustration of Himalayan Plants*, Lindley, J. のランの図譜類など、目を楽しませてくれる書も多数含まれている。

植物園には現在司書が居らず、そのため図書の利用は他の職員を通じてで、多少不便は忍んでいたただかなければならないのが現状ではあるが、貴重な図書がもっと活用され、基礎科学の発展につながることを期待したい。

## 国際交流室の活動

国際交流室 守 隆 夫 (動物学教室)

理学部に国際交流室が発足してから約二年半になりましたが、これまでの主な活動の経過を、反省と希望を交えて報告させていただきます。

発足当時は留学生諸君の希望をお聴きするため、

なかば強制的に各自指定された日に集まっていたが、話し合いを行っておりました。しかし、理学部の外国人留学生の多くは大学院生であるところから、それぞれの授業、研究、セミナー等があ

り、来られない場合が多いことと、学生諸君の希望もだいたい分ったので、年度初めなど特定の時を除いてこの種の集まりは行っておりません。そこで、これに代るものとして、せっかく世界各地から来られているわけですから、お国自慢という意味をこめて、スライドを用いて出身地の風物を紹介していただきました。キューバ、エジプトなど、比較的留学生の数も少なくない国の方々に演者をお願いしましたところ、とても興味深い、かつ有意義な紹介をしていただくことが出来ました。残念ながら参会者数はそれほど多くはありませんでした。せっかく数多くのスライドを用意していただき、大使館からわざわざ取り寄せた資料などを持参された演者に対して、10人以下の聴衆では申し訳ないところから、この試みは現在中断しております。

せっかくの機会でありますから学問的な問題について、セミナー等をすればよいとの御指摘もあるとは思いますが、理学部という特殊性から留学生諸君の専攻分野がそれぞれ違っているので、いわゆる勉強会的な集りを希望する声は全くなかったことと、適当な教官あるいは学生の方に講師をお願いしても、これまた10人以下の聴衆ではあまり意味のあるセミナーとはならないものと考えている次第です。各教室の活動がばらばらな上、自分の研究が一番おもしろくなってくる大学院生を主としている関係から、特定の日に多くの学生諸君に集まっていただくことは不可能に近いわけです。国際交流室としては、いつでも相談に応じることになっており、事実、時折相談もあります。その為の専用の部屋があるわけでもなく、研究室に来ていただくことになり、少し抵抗を感じられることと思います。そこで専用の部屋でもあれば、それなりに集まりを開く時間の工夫も出来ますし、

学生諸君も溜り場として気軽に出入りされ、お互いに知り合う機会も増えるものと思われます。今までは大学院掛の方の御努力で、空いた部屋を探していただき使用していたわけで、集まれる日もそれなりに決まってしまう次第です。

留学生諸君から出された希望で一番多かったのは、留学生がまとまって旅行に行きたいというものでしたが、これには費用、日時その他色々問題があって、遠出は不可能と思われます。旅行とは言い難いのですが、留学生同志の親睦をかねて見学会を企画したところ、それなりの御支持を得ました。しかし、それでも費用のかからない所という条件から、行かれる場所も限られてしまい、校内の資料館や大学院掛の方の御努力で無料にいただいた国立科学博物館などでした。この他に歩いて行ける距離にあり、低料金で入場できる場所があれば、ぜひお知らせ下さるようこの場を借りてお願いいたします。

我々の努力不足もあるでしょうが、色々な企画に参加して下さる方の数が少ないのが悩みの種です。しかし、留学生をお世話下さるチューターの方々がしっかりと相談相手になっており、また留学生の属す研究室の学生諸君もそれぞれお世話して下さるため、それほど問題となる相談事もないわけで、これはむしろ良い事と思っております。それでも我々では如何ともしがたい住宅、奨学金の問題など、社会問題ともなっている在日外国人の苦境はごく身近にあることを認識され、日本人の学生諸君は親身になって留学生諸君に接して下さるようお願いいたします。

最後に、留学生の方からはこんな事をしてほしいという御希望、指導教官の方からはこんな事をしたらという御意見を、どんどんお寄せ下さることを希望しております。

## 十周年を迎えた「地殻化学実験施設」

脇田 宏（地殻化学実験施設）

昭和63年4月、「東京大学理学部附属地殻化学実験施設」は設立満十年目を迎えた。5月12日には、本実験施設を設立するにあたりご尽力下さり、またその後の発展にもご支援いただいている学内・学外の関係者各位をお招きして、記念式典をとり行い、感謝の気持をお伝えするとともに、この十年間の研究活動の概要をご紹介することができた。

地殻化学実験施設は地殻内に発生する様々な現象を化学的に解明するための研究や実験を推進するとともに、これに必要な研究者の教育を行うことを目的として、昭和53年4月に設置された。大地震は地殻に生じる最も顕著な地球活動の一つで、人類の社会生活とも重要なかわりをもっているため、地震予知の研究は本実験施設の大きな研究課題であった。

日本における地震予知の観測や研究は昭和40年代のはじめから、測地学審議会から出される建議に基づき、国立大学や官庁諸機関によって行われてきている。従来、地震計測や測地・測量に代表される地球物理学的な観測が主体であった。しかし、昭和40年代の後半に入ると、地球化学的研究の重要性が次第に認識されるようになってきた。地殻内で発生する化学的変化の重要性が指摘され、地殻に存在する水が地震発生に本質的な役割を果していることが明らかになってきた。

いち早く地球化学的研究の重要性に気付かれたのは、当時、地球物理学教室の地震学講座の教授であった浅田敏先生で、このような研究をはじめたいという人を探しておられた。その頃、私はアメリカから帰国して、理学部の放射性同位元素研究室の助手に着任したばかりで、放射線の管理の他に、これまでとは違った新しい研究を始めたいと思っていた。アメリカで行っていたアポロ月試

料の化学的研究にも、まだ魅力はあったが、同じ様な研究を日本で続けることもない、とも思っていた。そうだからといって、地震予知という全く未知の研究分野に入るには、かなりの決心が必要であった。

新しい研究を始めたいという私を浅田先生は喜んで迎えて下さり、ご自身の研究費ばかりでなく、科学研究費や財団の助成金の申請にもお力添え下さるなど、地球化学的研究の育成には大変ご尽力下さった。

路線の敷かれていない道を進むには、勇気と努力を必要とする。その上、地震予知の研究・観測というものは、到底個人の努力だけで続けられるものではない。観測をはじめ前にも考えたことであるが、地震の前兆を検知するには、何年、いや何十年もの長期間に亘る観測を実施し、平常時における変動要因を理解した上で、始めて異常現象が認知できる。従って、はじめたからには、どんな理由があっても、途中で研究が出来なくなつてはそれまでの努力は無駄となる。

観測点を設け、データを収集したり、解析するにはある程度の組織がなくてはできない。理学部に所属する一介の助手という身分で、地方自治体の担当者と会い、観測のため深井戸を長期にわたって借用させてほしいと頼むのはいかにも難しいことであった。当時は、東海地震の緊迫性も世間の注目を集めてはならず、地震予知の研究を表看板に掲げるのははばかられた。そんな状態では、観測用の井戸を掘りたいなどという要求は夢の、また夢であった。

歴代の理学部長には大変お世話になった。地殻化学実験施設ができる前に学部長でいらした植村泰忠先生には、個人的な興味から行われている研究ではなく、理学部長も掌握している研究である

ことを示す証明書をつくっていただき、大変重宝した。施設ができてからも、西島和彦先生や江上信雄先生には理学部長として、観測にお世話になっている地元の方々に感謝状をお渡しいただいた。有馬朗人先生には御多忙の中を観測所を何ヶ所も見ていただいた。朽津耕三先生には施設の問題ばかりでなく、地球化学の発展に対しても有益な御意見をいただいた。現理学部長の藤田宏先生は、ご就任直後のお忙しさにもかかわらず、式典の準備段階から気軽に相談にのって下さり、当日の采配も振って下さった。

このように、1973年末から細々とはじめた地震予知の地球化学的研究は、時の理学部長田丸謙二先生によって取上げられ、大変なご努力の結果、助教授1名と、助手1名からなる理学部の附属施設、地殻化学実験施設が実現した。

研究を始めた頃から今日まで行っている観測は深層地下水中のラドン濃度の連続測定である。地震の原因となる地殻歪の変化を地球内部から放出する気体の放出量変化を測定することによって推測しようとする研究である。当初は、大学院生に手伝ってもらって、月1回地下水を採水して、ラドン濃度を測定していたのが、手製のラドン連続測定装置による観測に進歩し、さらに、今日では国内11ヶ所の地点に固定観測点を設け、テレメータ伝送による観測を行うまで発展している。この間、観測小屋もプレハブの物置から、数段ましな専用の観測舎に変わり、これに伴い、観測データの質もだんだんと良くなっていった。

昭和57年4月には、異常な地殻活動が見つけられた地域に機動的観測を実施するため、助手3名からなる総合移動観測班が置かれた。さらに、昭和60年4月には、地震と共通の地学的要因でおこる火山の噴火現象にも化学的研究を充実させるため定員が配当された。現在、本実験施設は施設長(兼任)、教授1名、助教授1名、助手4名で構成されている。

地殻化学実験施設で行う研究・観測は既存の学

問分野の境界にあることから、理学部の化学、地球物理学、地質学、3教室の密接な研究協力が得られている。とくに、初代施設長の飯山敏道教授(現在、千葉大学教授)をはじめ施設の運営委員を務めていただいている富永健、佐藤良輔、久城育夫の各教授には大変お世話をいただいている。

このような経過をたどり、地殻化学実験施設は今年の4月に設立10年を迎えた。これを記念して式典が開かれることとなった。

記念式典の式辞は設立当時の理学部長であった田丸先生に、御多忙は承知の上で、たっとうお願いした。式典の2~3日前、先生から、施設の現状について知りたい、というお電話をいただいた。伺うと、久しぶりだから夕飯を御馳走して下さいと言って、神楽坂近くの鰻屋につれて行って下さった。さわやかな夕暮であった。案内されたテーブルに付くなり、メモ用紙をお開きになり、「どんなことが分かったの?」とお尋ねになる。冷たいビールの一口がなんともおいしかったのを覚えている。

ラドン観測のこと、松代群発地震について発生モデルを提唱したこと、断層運動で水素が作られることを見つけたこと、そして、それがケイ酸塩の結合が切れて生じたラジカルと地下水との反応によって水素が生成されるという説明、また、ヘリウム同位体比の空間分布から日本列島下の構造がわかること、などなど10年間の研究で得られた知見をお話した。

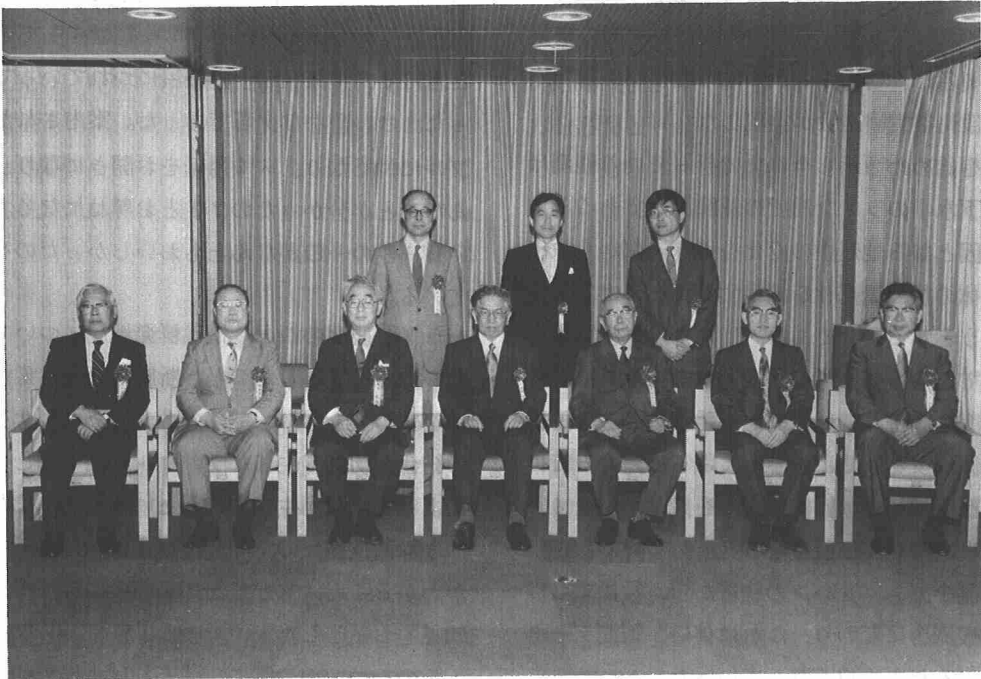
その一つ一つの話に、「それは世界で初めてわかったことなの?」、「どうしてそれが正しいと証明できるの?」、「その話はどうのように評価されているの?」といった短い質問をなさる。ソフトな口調に似合わず、大変シビアなご質問であった。「記念式典で、施設を作る時に説明したり、説得を重ねた方々に喜んでいただけるように話したいのよ」と付け加えられた。受け答えは次第に真剣になって、おいしい筈の蒲焼も味わう余裕もなく、「何が、学術的な成果なのか」、また「施設がで

きて、本当に良かった点は何か」について問い続けていた。

たった一つの例ではあるが、観測によって、地震の前兆現象を報告することもできた。その時々、世界一の論文だと思って投稿し、レフリーと大論争の末、採択された論文もあった。どの論文も一生懸命で、思い出が強く残っている。しかし、こうしたことは、自己満足にすぎないかもしれない。この他に、何があるだろう。本実験施設の一番の成果は、良い人材を集められたことではないだろうか。十周年の式典を開かなかつたら、こうした問をゆっくり考える時をもたなかつたかもしれない。

地殻化学実験施設の設立十周年にあたり、これまでご支援いただいている学内および学外の関係者各位、観測に協力いただいている地方自治体、地元の方々、観測に土地や井戸を提供して下さっている方々に心から感謝致します。最後になりましたが、隠れた共同研究者として、私共の研究を支えて下さっている理学部事務の皆様は深く御礼申し上げます。

今後もさらに努力を重ね、関連学問分野の進展に貢献できることを願っています。



#### 地殻化学実験施設設立十周年記念式典において

前列左から、下鶴大輔（名誉教授・火山噴火予知連絡会会長）、飯田益雄（米子工業高等専門学校校長）、浅田 敏（名誉教授・測地学審議会会長・地震予知連絡会会長）、藤田 宏（理学部長）、萩原尊礼（名誉教授・地震予知連絡会名誉会長）、茂木清夫（地震研究所所長）、高木章雄（東北大学教授）。

後列左から、樋口敬二（名古屋大学教授）、脇田 宏（施設長）、野津憲治（施設助教授）。



## 科学の言語と日常の言葉

寿栄松 宏 仁 (物理学教室)

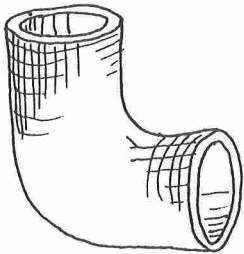
花粉症が蔓延していると聞く。降水量が少なく暖冬のためという。今年の水渴れを思いながら、先頃、つきあった配管工の人達との会話を思い出している。

理学部4号館では、先だって、節水のために実験設備の冷却水を循環方式とする工事を行なった。従来、冷却水は、貴重で高価な水道水を冷却だけの目的に使用し捨てていたもので、東京都での悪評をまつまでもなく、資源とお金の浪費であり、対策は少々遅きに失していたというべきであろう。ともかく、現在冷却装置は完成し順調に働いており、その効果をあげている。この稿は、しかし、この経済のことではない。冷却水道の配管をめぐる現場の配管工の人達との難解な、しかし興味深い議論の話である。

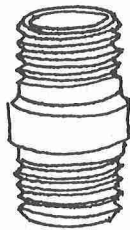
配管の人達は、彼ら仲間同志には通用するが我々には思いもつかない専門語で議論する。水道配管を思い出して頂きたい。配管を90°曲げる所にはL型に曲がった部品を使用する。彼らはこれを「エルボー」と呼ぶ。“elbow”(肘)が直輸入されたのであろう。また「ニップル」と呼ぶ部品がある。管と管を接合し液を通ずる部分であり、“nipple”(乳首)を意味する。これらは、英米で

は、その身体の部位とのアナロジーと共に、意味の二重性は理解され使われているのであろう。しかし、日本ではその二重性は必ずしも認識されず、特殊な部品名-専門語-として使用されるだけである。「チーズ」(“Tee”, T字管)「レジュサー」(“reducer”, 縮少管), 「チャッキ」(“check valve”, 逆止弁)など多くが口伝えに輸入されたことを示している。

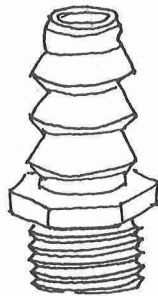
ここに、意外なものが登場する。「タケノコ」, 「ヒョットコ」, 「オワン」といった部品である。「タケノコ」とは金属配管の終端に、ゴムやビニルなどのホースを接続する部品であり、図のようにホースのすべり止めのために三角山の凹凸が刻まれている。名の通り筍である。「ヒョットコ」は、さらに巧妙である。エルボーの一種であるが、入口と出口の口径の違うものをいう(図)。正に「ひょっとこ」であり、このような完全で絶妙な日本語表現は他にないであろう。ところが、これら優れた表現「ヒョットコ」や「タケノコ」も、公の場では「異径曲管(継手)」とか「ホース継手」などジャリジャリした表現に変えられてしまう。現場の人達が、彼らのイメージを具現する最も手短かで的確な名詞を探し出す能力は、それが現場での迅速で完全な信号伝達に不可欠であるとはい



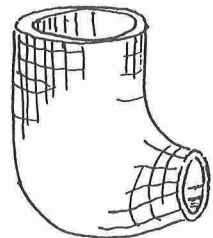
エルボー



ニップル



タケノコ



ヒョットコ



え、すぐれた智慧と感心する。ここに紹介した例は、目的とする部品の形状や機能に他の具象の品名を仮借するという、やや、対応が直接的なものであったが、新しい概念の表現手段としては、直截的であり、巧妙であり、的確である。

さて、我々の業界のことを思い出したい。電磁気学で用いられる言葉—電流、電荷、電力、電池、負荷などはこの「異径継手」の類であり、この手の科学言語が実に多い。これらは現在、英語でははるかに日常的な言葉、current, charge, power, cell, load で表現されている。つまり、新しい概念を表現するとき、形態や概念の類似するものを日常語の中から選び出すという手法が採られているように思われる。ここでは、「電子(電気)の」という属性は、混乱のおそれのある場合を除き省略されている。一方日本語では、「電」を被せ、意味を狭い分野の専門用語に限定すると同時に、日常は勿論他の分野にも存在しない特殊な人造語を作り出す。しかし、たとえば、「電流」は、「流れ」がもっている躍動的な具体性に富む物理的描像を持っているとはいえない。言葉のうえからは「電気」が主要属性、「流れ」は副次的属性の印象があり、流れとは別の具象性をもたないイメージを抱かす危険も持っている。漢字で合成された人造語で詳細な記述および分類—言葉の特殊化—に向かうあまり、描像や具象性—言葉の一般性—に憾を残す結果となっている。質量、原子量、真空、波動、正孔、放射光、超電算などの例は、この詳細記述(分類)派が歴史的に根深く、さらに現代に及んでいることをうかがわせている。科学言語(特に学術用語と呼ばれるとき)は、仏教語のように特殊な言葉でなければならない、日常語であってはならない、というような信仰があるかにみえる。最近話題の「超電導」は、「超伝導」だけでは特定記述に不十分であると考えた人々が、さらに属性「電子」を修飾した結果であるが、引き替えに物理的描像を損なっている。過度の修飾の結末を暗示するものは「電卓」=電子卓上計算機であり、肝心の計算機が抜け落

ちる滑稽が生れる。

このような七面倒を考えない「エルボー」派は、計算機言語や電子「デバイス」の分野では、完全な多数派であろう。急激な進歩のため対応する日本語を探す暇がないのであろう。基本的概念の教育や啓蒙に長期的な障害とならなければいいかと心配する。

さて、「ひょっとこ」族は少数派である。物理学の分野では、「抵抗」、「絶縁」、「波」、「干渉」など近年では、優れた例、「ゆらぎ」、「くりこみ」がある。日常語を転用した概念の明確な言語である。最近では、素粒子物理学の「ひも」理論が秀逸であろう。たとえば中間子はクォークと反クォークがゴム「ひも」のようなもので結ばれているという描像が成立つことから、名づけられたものである。詳細記述派からすれば、靴紐なのか、バイオリン弦なのか、計算機プログラムなのか、そして八九三のお兄さんなのか、区別がつかない、隠語ではないかとの批判はあろう。しかし、考えてみるに、素粒子の世界と、お兄さんの世界が同じ教室、同じ書籍で同席に論じられることはなく、混乱のおそれは極めて少ないのである。「統計揺動」、「再規格化」、「弦模型」などに比べ、より本質的表現であるように思われる。

ここで、今までの議論で見え隠れしている「俗語」(隠語)と「学術用語」の区別の問題がある。しかし、この区別の仕方は定義の厳密さの問題ではなく、権威主義的な問題、かなり日本の風土の問題なのではないかという気がする。他の例でいえば、農作業で、「種まき」をわざわざ「播種」といい「袋かけ」を「施袋」という機構は、農協からなのか、農業行政から来るのか、精神風土に繋がる根の深い問題を示唆しているように思われる。口語化への逆行というだけに留まるものではないだろう。

科学が日常の言葉で表現されたときの教科書の変りようを想像している。

今日も、肘や乳首、そして筍も「ひょっとこ」

も満足に働いてくれている。4号館で、年間数百万円に達する冷却水道代を百万円以下（主として電気代）に節約してくれるだろうと期待している。

ふと勘定が横切る。水道料金は理学部会計に、しかし、電気料金は教室会計かと。仔細は、ここでは問うまい。

## 山口嘉夫先生の紫綬褒賞受賞を祝して

江 口 徹（物理学教室）

本学名誉教授で原子核研究所の前所長であられた山口嘉夫教授が去る4月紫綬褒賞を受賞されました。理学部一同心よりお祝いを申し上げたいと思います。

山口先生は素粒子物理学（理論）の御専門で数多くのお仕事がありますが、中でもよく知られたものに、強い相互作用を行なう粒子の分類と対称性に関する研究（1959年）があります。この研究はその後1960年代に大きく発展したユニタリ対称性やカレント代数の理論等の端初をなすもので、1967年度の仁科記念賞がおくられています。山口先生はまた素粒子論の関連分野、原子核物理・天体物理等にも御造詣が深く、特に運動量空間で因子化した形をもつポテンシャルの模型（1954年）は原子核反応の理論で数多く用いられてきました。

先生は1970年代からIUPAP（国際純粋応用物理学連合）の委員、ICFA（大加速器建設のための国際委員会）の委員長を歴任され、高エネルギー物理学における国際協力に大きく貢献され、日本の高エネルギー部門のspokesman的役割を果たしてこられました。

また1983年から3年間東大原子核研究所所長として研究所の発展に尽力されました。

山口先生の学風は、物理的な直観を重んじ数学的形式にとらわれる事なく自然現象の本質をみぬこうとするもので、御自身のアイディアに熱中して話される時、聴衆をひきつける迫力があります。これからもますますお元気で御活躍される事をお祈りいたします。

## 和田文吾先生を偲んで

田 沢 仁 (植物学教室)



本学名誉教授和田文吾先生は糖尿病のため自宅療養中のところ、心不全におちいられ4月26日午前1時に日赤医療センターで87才の生涯を閉じられました。

先生は大正14年理学部植物学科を卒業され、昭和3年に講師、昭和19年には助教授になられ、篠遠喜人先生が第4講座に移られた後の遺伝学講座を担当されました。昭和24年教授になられてから昭和36年停年退官されるまで、実に32年7ヶ月にわたって本学における職務を全うされました。また昭和34年から2年間理学部附属植物園長をも併任されておられます。

先生の御研究では何と云っても、植物細胞の研究に生体観察と顕微解剖の手法を導入されたことが特筆すべきことでしょう。そのことは昭和23年「生体細胞による核分裂機構の研究」により日本遺伝学会賞を受けておられることからもうかがうことができます。生体細胞に対する種々の薬物の影響、あるいは、X線、ガンマー線などの影響を位相差顕微鏡によって16ミリ映画に撮影して行った研究も貴重な業績でした。これらの学術研究映画は昭和30年イタリー、スエーデン、イギリスの国際学会で発表され、世界の注目を浴びました。先生は昭和34～35年の両年に亘り、日本遺伝学会会長として遺伝学の発展に、また日本細胞生物学会

の創立にも御尽力されました。なかんづく国際細胞学雑誌キトロギアの創刊とその発展につくされた御功績は並々ならぬものがあります。

キトロギアの創刊(1929年8月)のいきさつについては、この広報6巻8号(1974)に編集同人の田中信徳先生(植物・名誉教授)がくわしく書かれておられます。当雑誌の創立は和田先生の岳父がつくられた公益法人和田薫幸会の援助によっております。本誌の編集は創立者・藤井健次郎東大名誉教授没後(1952)、篠遠喜人先生(元国際基督教大学学長)が主幹となり、和田先生は共同編集者となって引きつがれました。特に和田先生は東大・静岡大停年退官後、キトロギアの編集に専念されました。先生の論文はほとんどキトロギアに投稿掲載され、その数40篇余りにも達します。先生の最初の論文は1巻3号(1930)に掲載の独文による「ミズニラの精子放出の顕微解剖的研究」で、最後の論文は52巻1号(1987)の英文による「がん遺伝子がみられるがん細胞の発達過程」でありました。それが出版されたとき、学会事務室でこれが最後かなあとつぶやいておられたようにかがっております。

先生は和智家という武人の家でお育ちになりました。父上、兄上ともに軍人であり、御自身も第二次大戦前後に二度軍務につかれ、成人後、富士紡の創始者で有名な和田家の跡をつがれました。先生は恵まれた環境でのお暮らしにもかかわらず、華やかな生活を避けられ、常に質素で謹厳にお過ごしになりました。自己を律する武人の風格と、学問一筋の学者の情熱とをあわせもたれた方であり、御自身に厳しい先生も、他人にたいしては大変寛容でした。弟子達に対しても常に温顔で接し、声を荒げられたことなどは一度もないほどでありました。

晩年は健康に恵まれず、入退院を繰り返される生活でしたが、入院中もベッドで、キトロギアの校正をされたり、新たな論文の執筆をされたりしておられました。特に、眼が不自由になられてからも、虫眼鏡を使われて、学術誌を読まれたり、校正をなさったり、学問に対する厳しさを身をもって示されました。先生は「来る者は拒まず、去る者は追わず」の態度で、学閥のような派閥をつくることを大変嫌われ、弟子にも折にふれてそのことを戒められました。来る者に対してはいつも親身に接せられ、他大学出身者がゼミに加わることを歓迎されました。また、学問上の意見が合わない場合でも、先生は決して感情的にならず、弟子とも対等に正面から議論されました。派閥意識も先入観もたれず、すべて独立した研究者として接せられた先生の態度は、言うは易くして行うには難しいことでありましょう。

御家庭においては、模範的な御主人であり、常に暖かくて文化的な香りの高い生活をされておられました。御趣味を表にあらわされることはほとんどありませんでしたが、クラシック音楽を愛され、絵画に対するすぐれた観賞眼をもたれておりました。しかし、趣味に深入りして、専門がおろそかになることを、自ら戒めておられたように感じられました。

最後に、告別式の時、御遺族代表が御挨拶で、先生は好きな学問の研究と発展にすべてをささげ満足な生涯であったとおっしゃったことが、先生の全貌をあらわしていると思います。

---

(後記) 先生の御家族や御風格、また先生とキトロギアとの関係については、植物学教室先輩の太田次郎氏と佐藤正一氏に御教示いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

## 《 学部消息 》

### 教 授 会 メ モ

63年3月16日（水） 定例教授会

理学部4号館 1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認  
(2) 人事異動等報告  
(3) 奨学寄附金の受入れについて  
(4) 物品寄附の受入れについて  
(5) 昭和62年度卒業者の決定について  
(6) 学部研究生の受入れについて  
(7) 学部研究生の期間延長について  
(8) 受託研究員の受入れについて  
(9) 中間子科学研究センター規則（案）について  
(10) 人事委員会報告  
(11) 会計委員会報告  
(12) 企画委員会報告  
(13) その他

63年4月20日（水） 定例教授会

理学部4号館 1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認

(2) 人事異動等報告

(3) 昭和63年度私学研修員の受入れについて

(4) 学部学生の休学について

(5) 人事委員会報告

(6) 会計委員会報告

(7) 企画委員会報告

(8) 理学院計画委員会報告

(9) その他

63年5月18日（水） 定例教授会

理学部4号館 1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認  
(2) 人事異動等報告  
(3) 天文学教育研究センター規則（案）について  
(4) 人事委員会報告  
(5) 教務委員会報告  
(6) 企画委員会報告  
(7) 理学院計画委員会報告  
(8) その他

## 理学博士の学位取得者

〔昭和63年3月17日付（15名）〕

専攻	氏名	論文題目
論文博士	榎本陽子	惰性指数2または3の可換不足群を持つp-ブロックについて
論文博士	石井一平	3次元多様体のスパインと非特異力学点
論文博士	村田嘉弘	n連立有理的微分方程式系の動かない特異点・動く特異点
論文博士	山田真市	確率的計算の数学的理論とその数学的基礎
論文博士	若林功	解析関数の値の超越性
論文博士	山本昌宏	常微分方程式系のスペクトラル逆問題について
論文博士	安村通晃	プログラム変換に基づくコンパイラ最適化に関する研究
論文博士	卜部卓	海底地震観測による日本海溝中部（福島県沖）の地震学的地域性
論文博士	山崎孝治	南半球大気中のプラネタリー波・平均流相互作用と物質輸送に関する研究

専攻	氏名	論文題目
論文博士	江川 徹	赤外分光法と気体電子線回析法による振動の非調和性と分子構造の研究
論文博士	片木 敏行	アゾール系化合物活性コンフォーマーの理論的評価
論文博士	古川 行夫	振動分光法による導電性有機高分子の研究
論文博士	桂川 秀嗣	共鳴イオン化分光法による極超微量元素の検出法に関する基礎的研究
論文博士	大矢 禎一	酵母カルモジュリンに関する分子生物学的研究
論文博士	清水 和子	ナトリウムおよびリチウムビームの高分解能レーザー分光

〔昭和63年3月29日付（5名）〕

論文博士	渡部 潤一	ハレー彗星の自転とその活動
論文博士	岩崎 克則	助変数を含む常微分方程式に対するリーマン-ヒルベルト-バーコフ問題
論文博士	染田 清彦	気相分子の解離励起過程の動力学に関する実験的および理論的研究
論文博士	小澤 芳樹	3価の5B族元素をヘテロ原子とするポリ酸の構造
論文博士	阿波賀 邦夫	有機結晶中の強磁性的分子間相互作用

〔修業年限の特例による昭和63年3月17日付（1名）〕

物理学	香取 眞理	スピン系におけるコヒーレント異常と臨界現象 —系統的クラスター平均場近似による研究—
-----	-------	--

〔昭和63年4月25日付（1名）〕

動物学	竹居 光太郎	ヒキガエル摂餌行動の神経解剖学的研究
-----	--------	--------------------

〔昭和63年3月17日付（5名）〕

化学	米田 成一	隕石物質中の希土類元素および主成分元素の蒸発過程に関する実験的研究
生物化学	吉田 英哉	昆虫血液中のペプチドグリカン結合タンパク質に関する研究 —そのフェノール酸化酵素前駆体活性化系における機能—
地理学	松原 彰子	完新世における駿河湾沿岸低地の地形発達過程 —有孔虫化石群集に基づく古環境復元を中心に—
相関理化学	寺島 浩一	IV族遷移金属硫化物 $ZrS_z$ , $HfS_z$ の光物性の研究
同上	国井 達夫	超高純度 $AgCl_x Br_{1-x}$ 結晶内のポーラロンと励起子系の伝導現象と光物性の研究

〔昭和63年3月29日付（85名）〕

数学	岩瀬 順一	トラス $T^2$ 結び目に沿った Dehn 手術
同上	原岡 喜重	1階線形同次偏微分方程式に対する Galois 理論
同上	金子 昌信	リーマン面の $Pro-L$ 基本群及び組み紐群についての結果とガロア表現への応用
同上	陳 蘊剛	半線型放物型方程式の爆発解について；解析的ならびに数値的研究
情報科学	大沢 範高	インダクタンス型ジョセフソン理論の研究
同上	唐 培雄	直観主義的な型の理論；その表現力と計算可能性について
同上	岡 留剛	日本文入力方式の最適化に関する認知的知見

専攻	氏名	論文題目
情報科学	小野寺 民也	コンピュータ・グラフィック・システムにおける図形表示過程の形式化されたモデル
物理学	中畑 雅行	KAMIOKANDE - IIにおける $^8\text{B}$ 太陽ニュートリノの観測
同上	中村 正吾	プラスチック飛跡検出器を大面積に用いた超重粒子の探索
同上	秋葉 俊彦	哺乳類骨格筋の少角X線回折 - 特に低温で誘起される特異な測定回折像とその生理学的研究 -
同上	広瀬 恵子	急速凍結法による筋収縮過程の研究
同上	田村 裕和	$\text{K}^-$ 静止吸収における軽いラムダハイパー核の生成
同上	小池 裕司	格子QCDにおけるクォーク間ポテンシャル及びハドロンスベクトルへのダイナミカルクォークの影響
同上	重原 孝臣	準弾性散乱領域における原子核応答関数の研究
同上	河合 俊哉	2コサイクルとカレントの変換則
同上	小林 健一郎	トラス上のひもによる $Z_2$ オービフォールド模型の実現
同上	松尾 泰	普遍グラスマン多様体と Riemann 面上の共形不変な場の理論の幾何学的構造
同上	山田 宏文	くりこみ群による、有限温度宇における量子色力学の解析
同上	吉本 誠司	量子色力学の有効スカラー理論における相転移のくりこみ群による解析
同上	伊藤 浩之	電荷密度波における準安定性、適応性そして記憶
同上	井上 真	量子スピン系に対する統計力学的方法
同上	白石 賢二	ペロブスカイト系の電子構造と磁性
同上	高須 昌子	量子モンテカルロ法による低次元量子スピン系の熱力学的性質の研究
同上	寺井 章	ポリアセチレン中の非線型励起とそのダイナミクス
同上	平島 大	異方的超伝導体における第二の超伝導転移
同上	柳沢 孝	価数揺動系の変分理論
同上	荻原 千聡	$\text{a-Si:H}$ および $\text{a-Si:H/a-Si}_1-x\text{N}_x\text{:H}$ 超格子における電子正孔再結合過程
同上	花田 貴	電子回折による $\text{Si}(111)-7\times 7, -\sqrt{3}(\text{Al}, \text{Ga}, \text{In})$ 表面構造の研究
同上	閻 新中	高密度プラズマ中の電子-イオン間強結合効果の研究 -
同上	伊藤 真之	大マゼラン星雲の超新星 1987A からの X線
同上	奥出 信一郎	個体表面と衝突した分子の内部エネルギー状態分布
天文学	川合 靖	厚い降着円盤における子午面流の研究
同上	小林 秀行	野辺山ミリ波干渉計による $\text{H}_2\text{O}$ メーザー源の高精度位置分布の観測
同上	小松 秀実	回転の速い相対論的な星について
同上	佐藤 伸明	宇宙暗黒物質の消滅反応による太陽からの高エネルギーニュートリノの探索
同上	坪井 昌人	銀河系中心領域の構造と活動性
同上	中川 貴雄	銀河からの遠赤外放射の起源
同上	森沢 勝郎	活動銀河中心核の宇宙論的進化と X線背景放射
同上	ピラバット シリソムブーンラーブ	静止衛星の位置変化・軌道改良



専攻	氏名	論文題目
地球物理学	モハメドガラル	日本周辺のプレートと島弧システムに関する重力的および地震学的解釈
同上	片尾 浩	屈折法地震探査による大和盆地の構造と形成の研究
同上	寅丸 敦志	マグマ性噴火における物理過程 — マグマの発泡と二相流 —
化学	大林 千絵	マトリックス単離した有機スズ化合物の研究
同上	岩澤 尚子	カルコゲン原子を用いた有機分子集合体の分子設計と導電性の制御
同上	尾関 智二	ポリバナジン酸の結晶構造
同上	斎藤 努	コンドライトを用いた、カンラン石、金属相、液相間における元素の分配に関する実験的研究
同上	下田 昌克	ジセレノゲルマンの化学 — ジメチルジセレノゲルマンの光分解によるジメチルゲルミレンの発生と直接観測 —
同上	古野 哲郎	九員環を有するジテルペン化合物の合成研究
同上	森田 俊存	数種のアンモニウム及びホスホニウム塩における結合解離過程のDNMR法による研究
同上	守山 和宏	2-置換-1-(9-フルオレニル)ナフタレン類の回転異性体の酸性塩基性度
同上	由良 毅	スズ(II) エノラートを用いる立体選択的アルドール型反応及びマイケル型反応の開発とその触媒的反應への展開
生物化学	石野 知子	細胞融合によるマウス・フレンド細胞の分化誘導の初期反応の解析
同上	井川 俊太郎	癌遺伝子の活性化機構
同上	石川 雅之	大腸菌 put 遺伝子群の発現調節機構
同上	植月 太一	ヒトEF-1 $\alpha$ 染色体遺伝子の構造と発現に関する研究
同上	遠藤 聡史	<sup>1</sup> H-NMRによる免疫グロブリンの高次構造に関する研究
同上	岡本 仁	ショウジョウバエ間接飛翔筋を用いた、アクチンの遺伝子の解析
同上	長田 俊哉	$\alpha$ 2-Mを利用した細胞内への分子輸送システムの開発
同上	川島 真帆	ニワトリ胚型ミオシン軽鎖遺伝子の組織特異的発生段階特異的発現
同上	小林 久男	ウシ胃平滑筋の収縮調節蛋白のcDNAクローニング
同上	仙波 憲太郎	ヒト yes 関連遺伝子群の解析
同上	武藤 裕	<sup>1</sup> H-NMRによる補体系第三成分C3の高次構造に関する研究
同上	米村 重信	ウニ卵表層の細胞骨格および収縮環の形態学的生化学的研究
動物学	竹内 浩昭	ヒキガエル摂餌行動の中枢/末梢性制御に関する神経行動学的研究
同上	大岩 和弘	ウニ精子鞭毛における微小管滑り運動の力学的解析
同上	末松 直也	ラット成体膀胱上皮の分化転換機構の解析
同上	林 謙介	ニワトリ胚前胃上皮分化におけるペプシノゲン発現に関する分子的研究
同上	斎藤 修	鶏骨格筋の微小管蛋白質：構成蛋白質、局在及び機能の検討
同上	成瀬 清	2倍体雌性発生をもちいたメダカの遺伝子解析
植物学	根本 泰行	タバコ ( <i>Nicotina tabacum</i> L.) の染色体核の分子構築に関する研究
同上	中尾 俊史	大腸菌 put 遺伝子群の発現調節機構
同上	安部 俊彦	藍藻低CO <sub>2</sub> 細胞の光合成における無機炭素の輸送と固定に関する研究
地質学	山北 聡	四国東部-中央部秩父帯のジュラ紀-白亜紀初頭の重力滑動に起因する異地性地質体群

専攻	氏名	論文題目
地質学	松田博貴	二畳系葛生ドロマイトと上部更新統喜界島ドロマイトの産状と成因
同上	小竹信宏	生痕 <i>Spirophyton-Zoophycos</i> をつくる生物の古生態
同上	甄百鳴	沖縄県宮古島ピンザアブ洞穴産ミヤコノロジカ化石の古生物学的研究
鉱物学	廣井孝弘	反射スペクトルによる、キ石とカンラン石の混合物の同定
相関理化学	越智信昭	回転振電準位を選択した多原子分子のゼーマン量子ビート分光
同上	久保雅弘	非線型変分不等式と生物拡散問題への応用
同上	小林徹	ベンゾニトリル誘導体を含むファン・デア・ワールス錯体の電子励起状態における動的な挙動
同上	小林幸夫	固体リチウムK電子の動的構造因子の理論的研究
同上	園池公毅	P 700 の酸化還元差分子吸光係数に対する界面活性剤の影響
同上	堂前雅史	マウス尿のマーキング行動に関する行動内分泌学的研究
同上	細谷夏美	ヒトデ卵の成熟過程における微小管及びその結合蛋白質に関する研究

## 人事異動報告

(講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
物理	助教授	十倉好紀	63. 2. 29	復職	
情報	教授	益田隆司	63. 3. 1	配置換	筑波大学教授より
物理	"	釜江常好	63. 3. 16	昇任	
動物	"	石川統	63. 3. 16	"	教養学部助教授より
物理	"	宮澤弘成	63. 3. 31	停年退職	
植物	"	佐伯敏郎	"	"	
化学	"	朽津耕三	"	"	
"	"	大木道則	"	"	
生物化学	"	宮澤辰雄	"	"	
動物	教授	水野丈夫	63. 3. 31	停年退職	
"	"	上田一夫	"	"	
物理	助教授	永宮正治	"	辞職	
情報科学	教授	山田尚勇	63. 4. 1	配置換	学術情報センター教授へ
素粒子	"	戸塚洋二	"	"	宇宙線研教授へ
人類	助教授	西田利貞	"	昇任	京都大学教授へ
植物	講師	大隅良典	"	"	教養学部助教授へ
数学	教授	小谷眞一	"	"	京都大学助教授より
人類	"	遠藤萬里	"	"	
化学	"	近藤保	63. 4. 16	"	
数学	助教授	片岡清臣	63. 4. 1	採用	都立大学助教授より
"	"	織田孝幸	"	転任	新潟大学助教授より
"	"	俣野博	"	"	広島大学助教授より

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
素 粒 子	教 授	吉 村 太 彦	63. 4. 1	併 任	64. 3. 31まで
"	助教授	清 水 韶 光	"	"	"
"	"	近 藤 敬比古	"	"	"
中 間 子	教 授	近 藤 淳	63. 4. 8	"	"
"	助教授	今 里 純	"	"	63. 9. 30まで
物 理	教 授	菅 原 寛 孝	63. 4. 1	"	"
情 報 科 学	"	山 田 尚 勇	"	"	"
植 物	"	加 藤 栄	63. 4. 16	"	"
学際理学 客員講座	"	田 中 靖 郎	63. 4. 1	"	64. 3. 31まで
"	"	小川原 嘉 明	"	"	"
"	"	清 水 幹 夫	"	"	"
"	"	河 島 信 樹	"	"	"
"	"	森 本 喜三夫	"	"	"
"	"	槇 野 文 命	"	"	"
"	"	奥 田 治 之	"	"	"
"	"	西 田 篤 弘	"	"	"
"	"	水 谷 仁	"	"	"
"	助教授	鶴 田 浩一郎	"	"	"
"	"	小 山 孝一郎	"	"	"
"	"	中 村 良 治	"	"	"
"	"	市 川 行 和	"	"	"
"	"	田 中 健一郎	"	"	"
"	"	小 山 照 夫	"	"	"

(助 手)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
鉍 物	助 手	工 藤 康 弘	63. 2. 27	休 職	63. 8. 31まで
植 物	"	山 登 一 郎	63. 3. 31	辞 職	
化 学	"	増 田 昭 三	"	停年退職	
植 物	"	黒 沢 幸 子	"	"	
素 粒 子	"	梶 田 隆 章	63. 4. 1	配 置 換	宇宙線研助手へ
物 理	"	打 木 久 雄	"	昇 任	長岡技術科学大学助教授へ
"	"	宮 下 精 二	"	"	京都大学助教授へ
生 物 化 学	"	桂 勲	"	"	教養学部助教授へ
情 報 科 学	"	藤 代 一 成	"	転 任	筑波大学助手へ
物 理	"	三 明 康 郎	"	休職更新	63. 7. 24まで
"	"	下 浦 享	"	転 任	京都大学助手より
"	"	寺 井 章	"	採 用	
植 物	"	花 田 賢太郎	"	"	
物 理	"	吉 澤 雅 幸	"	"	

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
物 理	助 手	岸 田 隆	"	採 用	
"	"	三 尾 典 克	"	転 任	通産省工業技術院技官より
動 物	"	成 瀬 清	"	採 用	
物 理	"	香 取 眞 理	"	"	
鉱 物	"	豊 田 和 弘	"	"	
情 報 科学	"	高 井 昌 彰	"	"	
学 際 理学	"	井 上 一	"	併 任	64. 3. 31まで
客 員 講座	"	村 上 敏 夫	"	"	"
"	"	山 本 哲 生	"	"	"
"	"	佐々木 進	"	"	"
"	"	鈴 木 敏 一	"	"	"
"	"	満 田 和 久	"	"	"
"	"	芝 井 広	"	"	"
"	"	早 川 基	"	"	"
"	"	柳 澤 正 久	"	"	"
"	"	小 原 隆 博	"	"	"
"	"	松 崎 章 好	"	"	"
"	"	崎 本 一 博	"	"	"
"	"	伊 藤 健 二	"	"	"

## 外国人客員研究員報告

所 属	受入れ教官	国 籍	氏 名	現 職	研究員期間	備 考
生物化学科	酒 井 教 授	フ ラ ン ス	PUDLES, Julio	パリ大学教授	63. 3. 1~ 64. 1. 31	
物理学科	堀 田 教 授	アメリカ合衆国	呉 春 放	アイオワ大学 助教授	63. 5. 1~ 63. 10. 31	
物理学科	一 丸 教 授	ベトナム社会主義共和国	VO,Hong Anh	ベトナム国立原子 エネルギー研究所 研究員	63. 5. 7~ 63. 11. 6	
物理学科	猪 木 教 授	フ ラ ン ス	FLEK,Sonia	フランス政府（外 務省）奨学金留学 生	63. 10. 1~ 65. 3. 31	

# 昭和63年3月28日卒業者

## 数 学 科

浅川真広	太田啓史	須貝正夫	關博	二宮祥一
濱田淳一	深谷竜司	浅井浩司	飯田辰雄	池田徹
泉和生	太田亮次	大槻知忠	小川功	笠原泰
川嶋一浩	牛腸徹	後藤竜司	坂井宏之	笹原康浩
七條真明	鈴木一哉	須藤康彦	清野賢一	関根正幸
高木昭午	高田聖治	田口雄一郎	田中昭生	都築暢夫
坪田三千雄	藤堂潤子	中島俊樹	中島幸喜	西村健
春口巖	藤本雅宣	松田正樹	松村龍太郎	本山壽光
桃井武	山口浩徳	山崎満	山田武士	拜田稔

45名

## 情報科学科

青野泰子	安藤洋一	市川哲彦	内川淳	宇都宮直樹
榎本浩久	小笠原武史	北口隆也	北山文彦	久保田理恵
栗田直樹	樽谷典洋	小島英樹	関野公彦	武山誠
谷尚澄	平井伸英	平部雅士	渊武志	御園功
森徹	山下樹里			

22名

## 物 理 学 科

白川直樹	永田千尋	中村由起夫	根岸作力	大矢健一
小口芳彦	小原英治	中村滋	横井喜充	石野隆
岩下裕子	植松芳彦	遠藤彰	大淵康成	岡井正士
小田玲子	小畑淳	金子恵季	鎌仲義久	河原林透
清利正弘	栗原秀樹	黒木和彦	桑野泰宏	古賀淳二
小又志郎	齋木敏治	齋藤晴雄	佐野隆志	島村光太郎
清水達雄	尚和好美	白崎良演	進士壽威	杉之原立史
苑田尚之	高松広明	田代信	田村忠久	辻丸詔
筒井裕士	東郷仁磨	中野淳	中村隆司	羽澄昌史
秦直哉	羽多野忠	羽田野直道	原敏光	比留間貴久
藤井亮	古崎昭	政井一郎	南和彦	三原建弘
宮崎聡	森永実	安永卓生	山田篤志	山田洋一
山田康一	山中俊朗	吉田直之		

63名

## 天 文 学 科

関谷秀一	石附澄夫	土居守	長谷川隆	廣瀬重信
山岡均				

6名

地球物理学科

石渡正樹	上原克人	大湊隆雄	河原純	芝崎文一郎
田村達朗	辻本拓司	中田稔	中本泰史	肥後雅博
藤田司	藤原ちづる	村田功	森厚	森隆志
矢沼隆	吉田茂生			

17名

化学科

森田明弘	天野雅代	石井秀司	石橋公樹	伊名波良仁
犬飼鉄也	井口眞	今井豊	牛田東一	海老原育子
大澤晶子	岡田美智雄	鍵裕之	金井文彦	金澤大輔
金吉正実	河戸孝二	近藤寛	塩見大輔	澁谷規子
島田悟	島田敏宏	下島裕司	鈴木勝彦	高野圭
高原慎太郎	滝沢裕雄	只見康信	太刀川達也	内藤俊雄
中島雅子	中村健	中村裕子	中村洋介	早川聡
福西暢尚	福原信彦	藤井章照	藤田賢一	松浦由美子
森下夏樹	八巻竜太郎	山田泰史	弓削秀隆	

44名

生物化学科

池田宏幸	伊藤耕一	岩崎利泰	大久保宏一	奥原康司
小谷野菜峰子	嶋田毅	関本澄人	瀬古玲	高井和幸
濡木理	橋本佳子	畠中秀樹	馬見塚拓	森山賢治
山崎和彦	山仲喜美子	山藤りか	吉岡正太郎	米谷良之

20名

生物学科

(動物学)

松本文雄	大津良英	小林剛	三枝弘尚	佐々木哲彦
佐藤真紀	佐藤瑞紀	豊泉龍児	両角太郎	安平進士

10名

生物学科

(植物学)

太田敏郎	鎌田芳彰	北野裕三	佐藤典裕	孫戈虹
塚谷裕一	松浦彰	峰岸功一	吉田聡	

9名

生物学科

(人類学)

井野雅文	櫻木晃彦	松中歩	今西規	橋本千絵
------	------	-----	-----	------

5名

地 学 科

(地質学)  
鉱物学

稲葉克彦	岩田尚貴	長田昌彦	朽津信明	齊藤文雄
永井隆哉	中村美千彦	野溝明子	林靖浩	日高修
升元一彦	松本道夫			

12名

地 学 科

(地理学)

井川裕之	森下聖史	安達和隆	河内賢一	高崎善人
夏目哲	畑康人	久木幸治	若尾幸弘	

9名

合 計 262名

海 外 渡 航 者

(6月以上)

所 属	官 職	氏 名	渡 航 先	期 間	目 的
植 物	助 手	網 野 真 一	ドイッ連邦共和国	63. 2. 24~ 64. 7. 3	植物生理学の研究のため
中 間 子	〃	門 野 良 典	カ ナ ダ	63. 4. 11~ 64. 3. 31	高性能直流型ミュオンビームチャンネル及び実験ファシリティの建設と実験のため
物 理	教 授	矢 崎 紘 一	ドイッ連邦共和国	63. 4. 16~ 64. 3. 31	原子核におけるクォーク, グルーゴンの役割



## 昭和63年度科学研究費補助金採択（内定）さる

本年度科学研究費補助金の交付申請に対し、4月28日付で、本学事務局経由により同補助金の採択（内定）の通知がありました。（特別推進研究(1)、(2)は7月下旬交付内定のため未定）

理学部関係の申請件数および採択件数は次表のとおりで、総額 857,230,000 円（遺伝子実験施設 4,500,000 円：外数）でした。

### 昭和63年度科学研員補助金理学部申請・採択件数一覧表

63. 6. 1 現在

区分 研究種目	申請件数	採 択 件 数			採 択 率
		新 規	継 続	計	
特別推進研究(1)	1 (1)		1	1	
特別推進研究(2)	2 (2)		2	2	
がん特別研究(2)	5	1		1	20.0 %
核融合特別研究(2)	3	2		2	66.7 %
重点領域研究(1)	16	14		14	87.5 %
重点領域研究(2)	47 ②	19 ①		19 ①	40.4 %
特定研究(1)	4	4		4	100 %
特定研究(2)	2	2		2	100 %
総合研究 A	18 (4)	4	4	9	50 %
総合研究 B	6	2		2	33.3 %
一般研究 A	30 (12)	5	12	17	56.7 %
一般研究 B	54 (18)①	12	18	30	55.6 %
一般研究 C	87 (11)	29	11	40	45.98 %
奨励研究(A)	71 ①	40 ①	1	40 ①	56.3 %
試験研究(1)	5	1		1	20.0 %
試験研究(2)	23 (1)	4	1	5	21.7 %
奨励研究(A)特別研究員	50 (23)①	22	14 ①	36 ①	72.0 %
合 計	424 (72)⑤	161 ②	64 ①	225 ③	53.07 %

昨年は、申請件数 349 件、採択件数 177 件、採択率 50.7 %であった。

( ) 継続申請：内数      ○ 遺伝子実験施設：外数

## 東京大学職員の永年勤続者表彰

昭和63年3月31日付で、定年退職される下記職員に対する総長からの表彰状、記念品が3月25日(金)正午、学部長室において、朽津学部長から伝達された。

	記
化学	増田 昭三
植物	黒沢 幸子
植物園	水野 昌平
中央事務	堀 弘一

昭和63年4月12日(火)午後3時から神田学士会館において、永年勤続者(20年勤続)表彰式があり本学部勤務者のうち次の方々が表彰を受けた。

	記
物理	上田 秀子
地物	座主 繁男
化学	佐伯 喜美代
植物	小口 智子
人類	小林 裕美
”	増田 曙子
植物園	高橋 弘行
地物研	小松崎 久

## 理学部長と理職の交渉

理学部長と理学部職員組合(理職)の交渉はこの間昭和63年3月24日と4月25日に行われた。その主な内容は以下の通りである。

### 1. 専門行政職俸給表適用と技術職員の組織化について

理職はその後の検討状況を尋ね、また全技術職員を対象にした説明会を開くよう要望した。理学部技官問題小委員会の宮澤前委員長は、「説明会が開ける程事態が進展していない」と答えた。また小口新委員長は「6月の国大協総会であらすじが決まるであろう。宮澤前委員長と引き継ぎを行い、理学部でどうするかを検討している。宮澤素案に対する理職の対案も考慮に入れて検討する」と答えた。

### 2. 大学改革問題について

理職は性急な学院化をやめ、全構成員による根本に立ち返った議論を要求する3月16日付の声明を手渡し、その後の検討状況や「理学院」構想についての意見調査の結果を尋ねた。学部長は「全学の大学院問題懇談会の第二次中間答申が、3月の評議会で承認された。大学院教育や、事務組織の改編・充実、学内の意志決定組織等に関する第三次答申(4月19日付学内広報)が出され、5月の評議会で

承認されるであろう。理学部では大学院構想検討小委員会の報告(案)に基幹理学院の重視等を追加したものを3月の教授会で出席者全員の挙手です承した。第三次答申については教授会では文書を配付した上での議論はできなかったもので、主任会議で意見をあげてもらおう。意見調査に対しては68名の方から回答が寄せられ、特に職員の方は取り上げられ方が不満であるという意見が多かった。今後はより具体的に進めるために理学院計画委員会を設置し、その下に基幹理学院、広域理学院それぞれを検討する小委員会を設ける。来年度の調査費概算要求を出したい。必要によっては“事務機構・職員配置小委員会”も設置する」と答えた。理学院計画委員会の和田委員長は「理学院構想については全理学的なコンセンサスをとって進めていきたい。情報を職員の人たちに知らせることには最大限の努力を払う」と述べた。

理職は第三次答申が充分な議論抜きに承認されることに危惧を表明し、評議会で承認前に理学部で議論の場を設けるよう要望した。これに対し、学部長は「5月16日に理学院計画説明・懇談会を開く」と答えた。

### 3. 行(□)職員の行(→)振替について

理職は長年の懸案のいくつかに前進がみられたことに対して当局の努力を多とし、さらに緊急を要する一名についての解決を強く要望した。学部長は「努力する」と答えた。

### 4. 教務職員の待遇改善について

理職は来年定年を迎える方を含め、高位号俸者の早急な助手振替を要求し、さらに制度自体の抜本的な見直しを要求した。学部長は「問題はよく認識している。努力したい」と答えた。

### 5. 昇格について

理職は行(□)職員の2級昇格が実現したことに対して当局の努力を多とし、さらに行(□)職員の4級昇格、事務職員の5級6級昇格を要求した。学部長は「困難な点も多いがいろいろくふうして努力したい」と答えた。

### 6. その他

その他、定員外職員の定員化と待遇の改善、数学科に進学した全盲の方への対策、総合図書館の経理問題等について話し合われた。

## 大学院（理学院）構想に関する説明・懇談会について

理学部長及び理学部企画委員長（委員長藤田宏教授）の共催で、理学部の教官・職員を対象として昭和63年2月25日（木）午後5時半より約2時間半にわたって理学部1号館150号室で標記の説明・懇談会が行われた。説明会は委員長の説明があった後、

田隅三生教授から「昭和62年度理学部企画委員会大学院構想検討小委員会報告」について説明があり、出席者からの活発な質問、意見の交換が行われた。なお、出席者は最高時約40名であった。

## 理学院計画に関する説明・懇談会について

理学部長及び理学院計画委員会（委員長和田昭允教授）の共催で理学部の教職員及び理学系院生・学生を対象として昭和63年5月16日（月）午後5時から約2時間半にわたって理学部1号館150号室において標記説明・懇談会が行われた。学部長の挨拶に続いて、和田委員長、田隅理学院計画委員会広域

理学院小委員会委員長の説明があった後、学部長をはじめ出席関係教官からの補足説明と出席者からの活発な質問・意見の交換が行われた。なお、出席者は大学院生、学部学生が多数を占め、最高時に全体で約100名、延人数にして約130名であった。

## 各号館（運営委員）長名簿

（63. 4. 1現在）

号館名	所 属	職 名	氏 名	内線番号	任 期
1	物 理	教 授	井 野 正 三	4 2 0 8	63. 4. 1 ~ 64. 3. 31
2	動 物	教 授	嶋 昭 彦	4 4 4 1	63. 4. 1 ~ 64. 7. 31
3	天 文	教 授	堀 源 一 郎	4 2 5 7	63. 4. 1 ~ 64. 3. 31
4	物 理	教 授	壽 榮 松 宏 二	4 1 2 7	63. 4. 1 ~ 64. 3. 31
5	鉱 物	教 授	床 次 正 安	4 5 4 1	63. 4. 1 ~ 64. 3. 31
7	情 報	教 授	後 藤 英 一	4 1 1 3	63. 4. 1 ~ 64. 3. 31
化学	化 学	教 授	増 田 彰 正	4 3 4 9	63. 4. 1 ~ 64. 3. 31

（2号館：4ヶ月交替 動物→地理→植物→人類→動物）

## 教室主任・施設長等名簿

(昭 63. 4. 15 現在)

教室・施設名等	教室主任 施設長等氏名	電 話 番 号	自 宅 電 話 番 号 (緊急連絡先)
数 学 教 室	伊 原 康 隆	4 0 4 8	
情 報 科 学 教 室	国 井 利 泰	4 1 1 6	
物 理 学 教 室	上 村 洗	4 2 2 5	
天 文 学 教 室	堀 源一郎	4 2 5 7	
地 球 物 理 学 教 室	永 田 豊	4 2 8 8	
化 学 教 室	増 田 彰 正	4 3 4 9	
生 物 化 学 教 室	酒 井 彦 一	4 3 9 6	
動 物 学 教 室	嶋 昭 紘	4 4 4 1	
植 物 学 教 室	田 沢 仁	4 4 5 7	
人 類 学 教 室	尾 本 恵 市	4 4 8 2	
地 質 学 教 室	飯 島 東	4 5 2 2	
鉱 物 学 教 室	床 次 正 安	4 5 4 1	
地 理 学 教 室	鈴 木 秀 夫	4 5 7 2	
臨 海 実 験 所	高 橋 景 一	4 4 2 6 0468(81) 4105-7	
植 物 園	岩 槻 邦 男	(814) 0138~9	
地 球 物 理 研 究 施 設	小 口 高	4 5 9 0	
分 光 化 学 セ ン タ ー	増 田 彰 正	4 3 4 9	
中 間 子 科 学 研 究 セ ン タ ー	藤 田 宏	4 0 4 3	
地 殻 化 学 実 験 施 設	脇 田 宏	4 6 2 1	
素 粒 子 物 理 国 際 セ ン タ ー	有 馬 朗 人	4 1 2 1	
遺 伝 子 実 験 施 設	飯 野 敏 雄	4 4 6 5	
学 部 長	藤 田 宏	4 0 0 0	
評 議 員	和 田 昭 允	4 2 1 7	
評 議 員	小 口 高	4 5 9 0	
事 務 長	野 島 博	4 0 0 1	
事務長補佐(総務担当)	蓮 見 公 一	4 0 0 2	
事務長補佐(経理担当)	土 居 喜 公	4 0 0 4	
学 務 主 任	田 中 満 嘉	4 0 0 3	

## 編 集 後 記

理学部は号館がキャンパス内に広く分散しているため、相互の連絡がとりにくく、どうしても能率が悪くなります。広報がその辺のデメリットを少しでも改善する役に立てばと願いつつ編集作業を進めています。

このところ理学部の将来計画について皆さんの意識が高揚しています。この機会につっこんで検討してよりよい計画にし、さらには計画が是非実現に至るよう、そのためにも広報が役立つ面があれば大いに利用してもらいたいと思います。

お忙しい中を広報1号に原稿をお寄せいただいた諸先生に御礼申し上げます。  
(高橋)

---

### 編集：

高橋正征(植物)	内線	4474
佐藤勝彦(物理)		4207
横山茂之(生化)		4392
内藤周式(分光セ)		4600
田賀井篤平(鉱物)		4544